

## 鹿鳴館の朝鮮儒者

### ——朴戴陽の見た一八八四年の東京、表象の近代をめぐって

黄 鎬徳

#### 一 テキスト——朴戴陽の『東槎漫録』について

朴戴陽（パク・デヤン）の『東槎漫録（ドンサマンロク）』は、一八八四年末から一八八五年初までの二つの空間——近代形成期の朝鮮と日本とを横断しながら作成された一種の間文化的な見聞記であり、国外旅行記である。このテキストは一八八四年の甲申政変（京城事変）の後、日本に派遣された徐相雨（ソ・サンウ）正使、メーレンドルフ（Moellendorff = 穆麟徳、ドイツ出身の御用顧問）副使、朴戴陽従事官の使行のプロセスを従事官である朴戴陽が記録したものである。

従事官というのは朝鮮の国外使行において、おおよそ「文事」を担当する官吏であり、特に日本使行の場合においては、朝鮮なりの文化的な自信に繋がる大事な役であった。彼らは詩人であり、官吏であり、儒者でもある。文学と学問の交流や使行全体の過程を再現する役目について朴戴陽は次のように書いている。

放浪江湖一布衣	江湖を放浪したある布衣が
明時自謂任閑機	太平な時代の閑静さに自らを任せようとしたが
視看局勢多危険	時局の形勢を察するに危険が多く
慾説邦交辨是非	国交を説いて、是非の判然を問おうとする。
日域天低波杳杳	遠く遠い波に日本の空はやや低めで
星槎歲暮雪霏霏	歳暮の使船にはこんこんと雪が降り注ぐ
愧吾従事無材力	恥じる、わが従事官の役を、才質も力量もなきを
恐被詩人素食譏	無駄に国禄を食んだと詩人らの譏りを恐れる <sup>1</sup>

「国交を説いて、是非の判然を問う任務の重さ」と「詩人としての文事の難しさ」との二つの心情がよく表れている詩だと考えられる。ここで、彼は国際政治と間文化

的な出来事を記録しているが、彼の気掛かりは、なお、文学的なことにもあった。従事官という位置が詩人と官吏（外交官）と儒者とが交錯する地点、文化と文化の交差点にあった。だからこそ、われわれは政治的でもあり、文学的でもあるこのテキストを検討することによって、朝鮮儒者がどのように近代文明を認識し、表現したのか、東京の文明化がどのように評価されたのかという実像を確認できるだろう。明治日本、特に江戸から東京までの表象空間の変動を、ある朝鮮儒者の目を通じて考察したい。

明治期の東京を見る朝鮮の日本使者らの観点（一八七六—一八八四）はさまざまであった。日本による開港以来（一八七六年）、最初の修信使である金綺秀（キム・ギス）の疑問は複雑なものであった。一体、この奇怪なものは奇技淫巧か、利用厚生の結果か。東京は疑問だらけの空間であった。一八八〇年の日本を旅行した金弘集（キム・ホンジブ）の東京観は「万国」政治や経済論と繋がっていた。日本は自強を目指す官民一致の空間であり、東京は世界時間に近い場所あるいは、激変する万国圏に飛び込んだ変化の都市であった。こういう認識転換によって派遣された一八八一年の紳士遊覧団の見た東京は、その故に視察すべき富強な都市であり、積極的な研究対象そのものでもあった。とくに、一八八四年の甲申政変を引き起こすことになる革命的な開化派である朴泳孝（パク・ヨンヒョ）と金玉均（キム・オクキュン）は東京を開化政策の絶対的な模範とさえ考えた。彼らが見た一八八一、二年頃（一八八一年は金玉均一人で、一八八二年には二人共に公式使行で来日）の東京は野蛮を超える文明化の場所として見られた。衛生的な都市、東京はそれ自体が手本になる革命の空間であった。彼らは日本の開港、道路、新聞を一つの文明化のプロセスとして考え、東京を世界と万民に開けている公共圏として認識していた。<sup>2</sup>

だが、それまでの朝鮮官吏の日本観や東京認識と比べてみると、朴戴陽の日本観は非常に厳しいものであった。他者接触の状況が既存の儒者としての立場や観念を更に深化させるきっかけとして作用していたからだ。他者経験の衝撃を「衛正斥邪」という鎖国攘夷の思考を通じて鎮撫させ、日本や西欧を「禽獣と魔界の空間」として理解する朴戴陽の他者観——彼は完全に外部の者として、外部の観点から判断する。その外部性は近代知に対する儒学であり、力の関係に対する徳治の立場でもある。ある意味で、彼の観点は文明開化として象徴される明治日本の西欧化、資本主義化を見直す一つの糸口になるかも知れない。

## 二 朴戴陽の上野認識——表象圏と春秋大義

まず、上野という近代表象圏の歴史からみてみよう。徳川將軍家の菩提所という場所感や歴史性をもっていた上野は、どのようにして近代表象の代表的な場所になったのか。かかる近代的な変化や近代的な表象空間に対して朴戴陽はいかにこれを判断したか。幕府から東京府（明治元年）へ、また内務省（同八年）、農商務省（同一四年）から宮内省（同二二年）への移管と建設の歴史を紹介しながら、朴戴陽の認識や見物記を検討してみたい。

### 二一 上野博物館の小史——幕府の聖地から近代国家の表象へ

江戸の上野は幕府の東叡山寛永寺があり、そのため上野の山は江戸にとって一種の聖地であった。そして東照宮といえば日光が有名だが、上野にも東照宮はある。

もちろん、はじめは日光の東照社が唯一のものであったが、正保二年（一六四五年）東照社が宮号を授けられて以後、上野・水戸など全国に建立された神社にも同じ名前が付けられて一つの普通名詞となった。ある意味で、幕府の聖地が幕府の権威を象徴するようになったのである。加えて上野の「山内」には、徳川歴代將軍一五人中実に七人が葬られている。江戸は徳川氏の町であり、上野は徳川家の菩提寺がある「徳川幕府の聖地」であった。

そういう場所の持つ意味を一変させた出来事が明治維新であった。上野はある家、あるいは特定地域のものでなく、新しい明治国家を表象する近代的な場所になった。戊申戦争で東叡山の伽藍は灰塵に帰しており、それを契機にして新政府は上野という象徴空間を「幕府の聖地」から「近代国家の表象」へ変革する計画を立てる。

上野の土地は一八六八年（明治元年）東京府の管理地となり、翌年に一般国民に開放、一八七三年には東京府公園に指定された。一八七五年一二月、寛永寺中堂跡は博物館建設予定地として内務省に引き継がれ、ついで一八七六年一月、上野公園は博物館所管となった。さらにこの年一二月には博物館建設予定地が中堂跡から本坊跡に変更された。このようにして山下門内博物館からの博物館の上野移転が本格化するが、それに拍車をかけたのが内国勸業博覧会の開催である。一八七七年の第一回には閉会後の利用も目的として煉瓦造の美術館が建てられ、一八八一年の第二回にはコンドル設計の本館が完成し、一階が美術館として利用された。これは現在の本館とほぼ同位置に建てられ、二階建ての煉瓦造で、正面左右には小ドームの屋根飾りをつけていた。また、付属館として第一回内国勸業博覧会の美術館がそのまま利用された。

一八八一年四月、博物局は農商務省へ移管、併せて内山下町からの移転が進み、動

物園の建設工事も着手された。翌年三月二〇日、明治天皇臨幸のもと、開館式が執り行われ、式終了後、新築博物館と付属の動物園は一般に公開された。歴史・美術・天産（自然史）・図書館・動物園を含む大博物館が完成し、年末年始と月曜日を除いて毎日開館されるようになる。<sup>3</sup> 朴戴陽が上野を見たのはこの時期のことであった。

## 二-二 朴戴陽の虚学論——山水画と洋画

朴戴陽がみたものは一八八一年に完成された農商務省傘下の「博物館」であろう。歴史・美術・天産（自然史）・図書館・動物園を含む博物館で彼は何をみて、何をみなかったのか。観覧が終わったあと、朴戴陽は正使である徐相雨にこのように話している。

その景概の美しさと物産の繁華はすべてが人の製作する技巧から由来したことで、皆目、自然な気色がありません。人の耳目を眩惑させるものとしてはほどよいですが、実に観るに値する趣はありません。先頃、我が国の若者たちが韻折（要諦）を知らずに、一度、遊覧し、心がゆさぶられてしまいました。いうことには、その技巧は学んで実行する価値があり、その繁華は艶やかで美しい、また、その法制は習うべき、遊楽は豪放で愛するに値すると考えました。

なお、国の富強においても、まるですぐに成し遂げることができると考え、欲が極に達して、ほしいままに公財を浪費してしまいました。とうとう乱を引き起こし、人と家と国に禍をもたらしました。これはみな常日頃からの心がけて実学がなかったせいです。そんなことから考えて見ると「今の世の中、経書は國家に無益だ」と話しているものはまさに乱賊の先鋒なのです。<sup>4</sup>

国書の奉呈を終えた正使一行が初めて訪問した所は上野の博物館と動物園だった。興味深いところは「人巧」あるいは「製作之奇巧」という価値をめぐって対立する朴戴陽といわゆる「若者たち」の東京観である。ここで、日本を手本として考えた「我が国の若者たち」は朴泳孝、金玉均等の開化勢力であろうし、「一度、遊覧した」出来事は彼らの一八八二年の日本使行だろう。また、「公財の浪費」というのは朴泳孝が漢城府尹（今のソウル市長）になった後、東京を手本として試みた改革を意味する。衛生的で規律ある都市の建設、近代的道路などの交通体系完備、新聞などの言論制度の成立、すなわち公共圏の創案の試みがそれである。それが強い反対に直面した上で、開明の「若者たち」が選択したのが、一八八四年の甲申政変（京城事変）であった。しかし、明治維新を目指したその革命は、結局、失敗に終わった。朴戴陽一行の使行

はその事後処理のための訪問だった。

ゆえに、開化知識人である「若者たち」の東京観は儒者としての朴戴陽の立場とは全く異なるものだった。以前、一八八二年の時点で日本を旅行した朴泳孝はこのように書いていた。「人巧として天然に至ったなあ。これこそが概して日本の能事であるはずだ」。<sup>5</sup> 開化派官吏であった朴泳孝は上野の平岡に登った時、目に見える東京の繁華に驚いた一方、二十三万五千戸を越えた東京の規模に驚嘆した。朴泳孝は平岡でも東京の十分の一しか見られないという事実を惜しんでいた。ところが、まさにその場所で儒者朴戴陽はこのように話している。「その景概の美しさと物産の繁華はすべてが人の製作する技巧から由来したことなので、皆目、自然な気色がありません」。朴泳孝が「能事=実」を見たその場で徐相雨と朴戴陽は「耳目を眩惑させる害毒」、あるいは「虚」を見ている。徐相雨正使の答はより一層断固としていた。

一抹の才芸があるとしても文を読まないことは、むしろ才芸も技術もなく文も読まないことよりもよくないことです。一体、この国は花一輪、一握りの草、樹ひと株、石一個も人為をこうむらないものがありません。あらゆる居処や器用に属することにおいてもみなその害毒をこうむっています。

彼らは福澤諭吉や金玉均らが信奉していた「科学=洋学=実学」というつながりを信じていない。彼らは自然が自然としてそのままあることを願う。福澤諭吉に感化を受けた金玉均と朴泳孝が西洋科学と国際論を実学として感じたとする、儒者の実学の軸は心学、即ち性理学であった。「心地上無實學」という言葉がそれを示している。「実」に関する立場自体がそれぞれ異なったのだ。

朴戴陽が記録していた「博物」は概して人形、仏像、書籍、刀、書、絵、琴、笙簧、笙篁、衣服などの器物と農耕桑織の機構、また金銀銅石と医薬ト筮と動物標本などの標本だった。そして、この「博物」というのが「博覧強記」、即ち広く古今の書物や自然を見て、物事をよく覚えていることとは異なる出来事だと判断する。人間の手がかかった事実（人巧の害毒）を発見したのである。万国の万物を集めていた博物館で彼らは「当然、山水の中にあるべきものが人の手中にある」と嘆く。要するに彼は近代的表象空間を山水画の感覚で見ているのだ。

汽車・軍艦・工場の文明と、山川・風景の自然との交差は、従来の山水画的な表象方式を不可能にした。かかる表象の限界は、「まるで一枚の洋画を見ているようである」（『如対洋畫一幅』、『使和記略』、一三六頁）という朴泳孝の言葉にも表れている。

開化官僚である朴泳孝が使行（一八八二年）の表象と報告のために写真を写して記録したという事実と比較すると、朴戴陽の山水画的な感覚と漢詩を通じての情緒の喚起は、上野という近代の表象空間とはきわめて不協和であった。

新たな経験は、新しい表象体系を要求していた。が、彼は「西欧化＝文明化」という明治日本の基本前提を初めから拒否していたため、物の内部、近代文物の再現のプロセスでぶつかる表象の危機にも遭わなかった。彼は上野、浅草のような人が集まった空間を一言で「乱れていて慌しく、晴れて清潔な風雅が一つもない」と見下していた。自然風景と人間風俗の分離、それは完全に通信使時代のレトリックでもあり、華夷論的な見方でもある。風景と思考とはある一体性をもっている。考えによって風景を見る方式が変わり、風景の描写には考え方が介入する。彼は山水画的な感覚である静かさ、趣、自然さという基準による見方を通し、上野・博物館という近代表象の価値を切下げている。

### 二-三 博物館傘下の動物園——朴戴陽の民生論

近代の動物園はあらゆる事物と生物の理想的な配置を考えたロマン主義的なユートピア観とつながっている。エデンの園のような楽園がそのモデルであった。だが、実際の動物園事業を支配した言説は「百科全書」の科学言説であった。中世の動物が持っていた神話的・想像的な魔術性を抜け出させることで、科学的な操作や管理をし、また情報資料や研究対象として配置する扱いは、どこまでも肉体と靈魂の二元論に基づいている。かかる近代の動物は、すべてを物理法則に従属させる機械論的モデルの結果であり、文明による自然操作の象徴でもある。動物園は生命を持っているすべての対象を収集して分類し、それらを一つの場所で観望する施設である。ゆえに学問的な分類のための網羅性は世界性、あるいは帝国の膨張や規律を思い起こさせる。

動物園は近代文明化の象徴でもあり、帝国の表象でもあった（大東亜博物館計画の一環としての動物園）。コレクションの大きさは帝国の広さと植民地の大きさと関係が深い。大英帝国の時代、この一望監視施設は時々植民地の動物だけでなく、「文明」に到達できない肉体、言いかえれば植民地の原住民・身体障害者・狂人らまでを「半獣半人」として展示したという。国家規律と近代表象の体系としての動物園の機能は基本的には博物館と類似している。したがってフーコーは動物園を「一望監視施設」(panopticon)の一種として主張した。要するに「一望監視施設は博物学者の所産であるのだ」。<sup>6</sup>

ある儒者が上野を歩いていく。博物館を経て動物園へ、正確には博物館の中の動物

園へ。近代日本の最初の動物園が博物館の附属施設であった事実は、象徴的である。一八八一年、農商務省は博物館の移転決定と共に動物園の建設工事にも着手した。動物園は、元々博物館傘下であった。もちろん、一八八〇年代までの動物園は近代国家のパスポート的な要素を越えないほどのものだったが、結局それは帝国への欲望から自由なものではなかった。そのうえに、その後、一八八八年に博物館は宮内省図書寮の付属になり、翌一八八九年には帝国博物館になった。ここにコレクションの主体として、「集める」場所の供与者としての帝室の存在が明らかになった。もちろん、象徴的な意味にすぎないかもしれないが、現在の「東京都恩賜上野動物園」という看板が見せ続けているように、その巨大な表象空間と規律空間をひと目で一望する視線の頂点には明治国家の象徴権力——恩賜、教育、軍隊、遊びの「一望点」として天皇があった。<sup>7</sup>それが機関であるか、もしくは現人神であるかは関係なく、天皇制に基づいた日本型近代国家が博物館と動物園の両方を「帝室管理」の近代表象として要求していた。なぜなら、明治国家とは伝統の権威を象徴する天皇を通じて近代への志向を表象・防衛し、天皇という人格神の威儀を内在化させることで国家規律や現実の権力を発生させるシステムにほかならないからだ。

一方で、朴戴陽は動物園という空間をいかにみていたのか。次の通り、彼は、「徳治」という政治概念や「賢君」のような人格的な君主概念を依然として堅持していて、そのゆえに表象空間に対する意識も、やはりそれに基づいているものであった。

近時の開化以来、休まず建設に努め、遠方より工作物種を集めてきた。その費用はどれほどだろうか。もし事物に博識なひと（「博物者」）に見せれば、たまには取るべきものもあるかもしれない。しかし今日の天下において、どうしても国のための急務ではないだろう。君主の心はだんだん蕩然となっており、民生はより一層困窮していくのに、なお安定を望む。自ら奢り、大国の模倣をして、隣国を軽視するのにはあざ笑いしか出ない。<sup>8</sup>

見方によれば、引用の通り「博物者に見せると、たまには取るべきものもあるかもしれない」。とは言え、朴戴陽はその次にこのように話す。「十分、考えてみても、それ（動物園、引用者）が開化の方策の中で国の急務とすると、私は開化という事の価値を信じられない」。彼の見方が「民生の暮らし」にあったからだ。つぎは彼が大坂の造幣局・機器廠・工作鍛錬・軍訓練などを見た後、書いた漢詩である。

造錢製器勢全雄	造幣して機器を作るその勢い、全く雄壮で
妙法新方外國通	巧妙で新しい方法は外国に通じる
依様葫虜非不美	夷のように真似さえ美しくないことではないが
民生其奈怨年風	その民生はどうして豊年を恨むのか
子孫之計策長城	子孫のための計で万里長城を策するというが
從古狂愚有幾羸	古より、狂って愚かな者が、またいくらいただろうか
文徳不修有尚武	文徳は磨かないで、ひたすら武のみを崇尚する
鑄兵猶不反銷兵	武器を溶かすことがむしろ作ることより勝るのに

帝国と共に実現した資本主義に対する朴戴陽なりの認識をどのように評価すべきか。彼は資本あるいは産業文明をその自らのルールでなく、いわゆる「民生」という観点で理解している。彼にとっては「大本＝農」を苦しめる制度として、貨幣、貨幣と軍備の後から作用する明治国家、明治国家の富を流出させる西洋帝国のすべてが民生の敵に見えた。かかる交換の体系を見ながら、彼は長城でなく文徳を磨きなさいと話している。ここで問題になるのは、現実的な結果や世界情勢でなく、まさに帝国と資本を見る考え方であろう。ここで彼は文明開化の裏面にある民生の困窮を見ようとした。彼は文明開化を「民生から明治国家へ」、「国家から西洋帝国へ」の富の移動として把握していた。彼は重税による「農村の貧窮」を開化政策による「都市の虚飾」と対照させている。

利は外国に運ばれていく（「利輸於外国」）。兵を治めることが非常に活発だが、兵が大本（農）を害している。このようにしても十分に国の富や兵力が強くなるという話を、私は信じない。<sup>9</sup>

彼にとっての「経済」は「農者天下之大本」、あるいは「経世済民」という価値に限定されていたのだ。儒者のほとんどが、このように交換に対する不信と、自然・農産に対する信奉に基盤をおいていた。保守的な儒者たちは東京のような大都市の成立自体を否定的に見ていた。本質的な生産がない消費都市として考えたのだろう。

朝鮮末期の代表的儒者であり、義兵将でもある崔益鉉（チュ・イクヒョン）が考えた有限者と無限者（「無窮者」）との概念対立がそれである。彼は生産の周期（cycle）が全く異なる産物の間の不平等交換を明らかにした。彼が取り上げた鎖国論の根拠のひとつも、まさに土地から生産する有限の自然産物（「産於地而有限者」）と、機械の

力から大量に生産する人工産物（「生於手而無窮者」）との亡国的な交換にあった。<sup>10</sup> 動物園のように、今すぐには不必要に見えるもの、目に見える、目に見せる開化都市の建設は、朴戴陽には砂上の楼閣に違いなかった。

### 三 儒者の鹿鳴館——ワルツを聞いて堯舜の夔を考える

一八八五年二月二二日（陰曆一月八日）、各国公使を来訪して来た正使一行にある招待状が飛び込んだ。陸軍卿である大山巖からの鹿鳴館夜会への招待であった。三月九日（陰曆一月二三日）。しかし夜会があった日は朝から運がよくなかったようだ。徐相雨と朴戴陽、朝の散歩であったが、そのまま道に迷って東京の警察は大仕事になった。<sup>11</sup> 思いの外、東京の道は複雑だったし、東京の町はわずらわしかった。そしてやっと到着した延遠館の舞踏会で朴戴陽は、その日の宴会における女主人役だった大山捨松夫人に果ては手をつかまれてしまった。

日本の女子らはみな西洋の服を着て、西洋の踊りを踊った。これは維新以後からの風俗という。女子の開化が男子の開化に遜色がないことを考えて見れば、開化以前に女子に良い風俗がなかったという事実を推測できる。より可笑しい事は、年齢二十あまりのある美しい女性が突然に私の手を結んでなにか話していた。通譯する者に尋ねると「彼女はまさに陸軍卿の夫人である」が、宴会に出ていただき感謝しているとの話だった。

私と言えば机頭の詰まらない書生として、娼婦や酒場の女の手も取ったことがないのに、いきなりこういうことにあうとは、動揺がおさまらない気持ちだった。通譯する者がいう。「これは我が国が貴賓を接待する一番の作法です。別に、奇怪に感じないでください」。それで、私は突然によろこぶ顔を作り、「宴会を催して招待してくれたおかげで、こういう立派な宴会に参席するようになりました」と感謝した。これはことわざに「狂人が横にいれば平気な人も狂ってしまう」という通りだ。男女の順序がなく、尊卑の倫理も無い。はなはだ醜悪である。偉大な舜の世は遠く、神々しい夔（舜皇帝の時、楽を担当した人）の音も現れずにいるので、楽声が協和していない。そのまま、彼らがお互い踊っているのは果してなんなのか。<sup>12</sup>

その理由の為だろうか。この場所についての彼の記録は、他のどの場所よりも厳し

い。夜会に到着した直後から聞こえてくる音楽は自身の礼楽観とは全く不協和であった。とくに、朴戴陽は男女が共に踊る「ダンス」に気がくじけた。そのような彼に「近代のジェンダー」がまるで握手するように最後の襲撃を加えてきたのだろう。音を治めることが治の根本であるとする、また男女の分別が礼の始めであるとする、鹿鳴館期の日本は儒者にとっては「徳治」の場所ではなく、「乱世」の極致であった。大山捨松夫人は日本最初的女子留学生として長期間の米国体験をした開化女性で、鹿鳴館が生まれた一八八四年十月二七日からずっとこの空間の主役だった。

朴戴陽には大山夫人や井上夫人らを含めた全てのものが新しいことであり、不可解な風景であった。海軍軍楽隊による演奏もそうであろう。「和楽の故障」という世間の非難のため入った一、二曲の和楽以外には十四内外のほとんどの音楽が洋楽であったし、その曲名は招待状の中に原語で印刷されていた。<sup>13</sup>

当然のことだが、皆が洋服を着ていたし、服飾そのものが富国強兵の熱望を表象していた。ある意味で鹿鳴館という空間は、「西欧のディクテーションの通り、書き直している」という「西欧に向かう表象、あるいはメッセージ」であった。西欧との平等条約の締結、即ち条約改正の熱望がその中樞動機だったのだ。明治の官僚たちは「欧化」こそが、国際政治や開化の方策であると信じていたのだ。「徳化」と「欧化」という二つの極端が鹿鳴館の延遠館の中で、ぎこちなく対面していた。夜会のダンスとは、この政治性が表象される一つの方式に他ならなかったかもしれない。

#### 四 国粋と文明開化——維新のジレンマと二つの盲目

明治二十年代——一八八〇年代中後期の鹿鳴館時代が過ぎる中で、日本の国粋主義はその姿を明らかに現す。この動きはほぼ「鹿鳴館への反動」として説明されているものだ。貴族化するエリート、傲慢な西欧帝国に対する感情的な反発から始まった批判の動きは、次第に「文明開化＝擬西欧化」自体に対する疑念へ変り始めた。いわゆる「無知な国民を文明開化へ導くエリート」は、その瞬間「踊る内閣」（dancing cabinet）に見えた。元々不平等条約改正のため企画された欧化政策の一つだったが、その「目に見える西欧化」によって逆に「見えたの」は西欧化の向こう側、つまり「国粋」と「平民」の存在であった。「国民」の苦しい暮らしの上で「ダンス」を踊っている伊藤と井上らは、直に民間の中間階級の覚醒と反発に直面していた。その反発の方向は二つであった。自由民権運動と国粋主義がそれだ。一八八七年、徳富蘇峰が創刊した「国民の友」及びそれに基づいた平民主義と、三宅雪嶺などの政教社が創刊した「日本人」の国粋主義がその二つの傾向の体表格であろう。この二つは一見対立す

る考え方のように見えるが、実は両方共に特権階級が西欧文明をうわべだけの物質的プロセスとして限定しようとすることに反対していた。その声は自由民権運動の抑圧によって、いよいよ国粹主義のスローガンの下に高まっていた。ナショナリズムは日本中産階級のイデオロギーになっていた。文明 (civilization) に対する文化 (culture) の挑戦が始まっていた。「教育勅語」の中に入ってきた「国体」、「皇統一系」、「日本国の精神」、「忠君愛国」の概念と文化的な志向は、聖徳太子の「憲法十七条」にまでさかのぼって伝統化されている。

朴戴陽はある意味で明治日本の擬西欧化の熱気、不平等条約改正運動と結ばれていた表象圏の西洋化を見ていた。しかし彼はその表象圏の姿と音を完全な他者として受け止めた。いや、拒んでいた。彼はその他者性の根拠と表象空間の向こう側、あるいは深淵を尋ねようとしなかった。しかし近代性を完全な外部として扱っていた儒学者の観点にも、聞き入るだけの値打ちがないのではない。儒者の徳化論は西欧化論の排除に基づいた時代遅れなものかもしれないが、その排除は単純な無知ではない。帝国主義と資本主義の非道徳性、民生と農に「大本」する態度は明治日本の下級階級の破綻をみていた。それは、むろん述べた通り、近代性からの完全な外部性によって発見されたことだし、それは現実的には不可能な外部性であった。国際条約によって、世界経済システムに巻き込まれている限り、完全な外部としては存在できないわけである。

が、他者性の根拠、または表象空間の深淵を尋ねることができなかったのは、鹿鳴館の企画者である井上馨においても同じだったかも知れない。なぜなら、全面的な模倣に向けた彼の西欧熱は、認定ではなく、皮肉と風刺として戻ってきたからだ。その華麗さのため、国民の反発にぶつかって破綻するほどの鹿鳴館。果たして実像はどうだったのか。

目に見える表象の近代化、あるいは西欧化を象徴していた鹿鳴館は、ある西洋人によって「温泉が付いている二流娯楽館」として描かれていた (ピエール・ロティ『日本の秋』)。ビゴーはそのなかの井上夫婦を人まねをする猿として風刺していた。国民的な公憤の対象になった鹿鳴館は、その企画の目指していた西欧人の視線を引くことさえ失敗した。井上は政治の前面から後へ下がる状況になった。彼にとっては、それが最後の「前面」であった。

続いて起きていた自由民権運動と国粹主義の風潮の中、明治政府は自由民権運動を抑圧し、国粹主義を利用し、専有した。朴戴陽の疑心とは微妙な差異があるままに、民生と民主が犠牲にされた上で、「日本」という国家表象、「国粹」という文化特殊主

義が発明され始めた。

明治二十年を基点とし、上からの一方的な近代化および、全面的な西欧化に対抗する動きの中心論理として「民権」あるいは「国粹」という価値が、新興中産層のイデオロギーとして発見されていた。「対象的」ではなく「關係的」な政治・文化的システムとしての代議制や国民文化への要求がそれである。しかし、度重なる戦争と植民地競争のなか、「民権」という政治的価値や「国粹」という文化的アイデンティティは国益という領土的な限界に縛られ、「利は本国に運ばれていく」国権論や帝国主義の下部論理に転落していく。

#### 註

- 1 別途の表明がない引用の出処は『東槎漫録』、民族文化文庫刊行会（ソウル）、一九八二。引用の漢詩は『東槎漫録』所在の「東槎漫詠」、一八〇頁。翻訳はすべて、この本からの拙訳。
- 2 黄鎬徳、「韓国近代形成期の文章配置と日本の役割」、二〇〇二年度国際交流フェロウシップ最終報告書、国際交流基金、二〇〇三を参考。
- 3 以上、上野博物館の変遷については東京国立博物館ホームページ「館の歴史」七、上野博物館を参照（<http://www.tnm.go.jp/jp/history/07.html>）（二〇〇五年三月五日最終アクセス）。
- 4 「但、其境概之美麗物色之繁華、皆由製作之奇巧、殊無自然之氣相、適足以欺人其目、實無賞玩之趣、鬻者年少輩、不知錮折、一經游覽、心神動盪、以爲其奇巧可學、而爲其繁華可馳、而習其法制可摹、而冶遊樂而、豪放可愛、至於富強、亦可立致動欲、縱性浪費公財、以至倡亂、禍人家國、此皆由平日心地上無實學之致也、由視觀之、世之謂經術无益於國家者、實爲亂賊之前芽矣。』『東槎漫録』、一六九頁。
- 5 「以人巧臻天然、蓋日本能事也。」朴泳孝、『使和記略』、民族文化文庫刊行会（ソウル）、一九八二、一三一頁。
- 6 ミッシェル・フーコー、『監獄の誕生』、田村淑訳、新潮社、一九七七、二〇四頁。
- 7 渡辺守雄他、『動物園というメディア』、青弓社、二〇〇〇、四一頁。
- 8 「近自開化以來、汲汲營營、鳩聚遐通工作物種、其費何、使博物者觀之、惑有取焉、從非今日天下爲國急務宜乎、君心漸蕩、民生愈困、而猶怒安、自奢大傲、視隣國不滿一晒也。』『東槎漫録』、一六九頁。
- 9 「利輸於外國治兵甚勤、而兵害於大本、如此而能使國富、能使兵強者、吾不信也。』『東槎漫録』、一六六頁。
- 10 「一日結和、則彼賊所欲、在於交易物貨、而彼之物貨、類皆淫奢奇玩、生於手而無窮者也、我之物貨類皆民命所寄、產於地而有限者也、而有限之津液膏腴民命所寄者、易無窮之淫奢奇玩蠱心敗俗者、而歲必以鉅萬計、則不數年、而東土數千里、荒疇敗屋無復支存而國必隨之矣。』「持斧伏闕斥和議疏」、『國譯・勉菴集』、ソル出版社、一九九七、一二六頁、（原文、三四頁）。
- 11 『時事新報』、明治十八年三月一日。
- 12 「日邦女子、皆能服洋之服、舞洋之舞、此自維新以後俗、其女子開化不遜於男子、開化以前女子之無善俗、推可知也、充有可笑事、有一美妹年二十餘者、從人海中、忽握余手、有所云云、問諸舌人、此乃陸軍卿之夫人、蓋謝赴宴語也、余以床頭一書生、媚婦酒母之手未嘗一握、忽遇此境、不覺恟恍吾人、道此是我國待貴賓第一件事、勿以爲怪、余乃遽作欣然之色、謝其設宴、來速護參隱遊、此俗所謂狂者在側、不狂者然隨而狂也、男女無倫尊卑、無竟至於此極甚可醜也、大舜世遠、神變不作石鏡、未諧彼相律、而舞者果何邪。』『東槎漫録』、一七三—一七四頁。
- 13 富田仁、『鹿鳴館——擬西洋化の世界』、白水社、一九八四（一九九五）、一六三—一七二頁。

ファン・ホドク

カリフォルニア大学アーバイン校 東アジア語文学科 訪問研究員  
研究テーマ：近代韓国文学、日韓比較文学、開化期と植民地時代